しゃもじ（杓子）

佐藤垢石

青空文庫

二、三日前、隣村の老友が私の病床を訪れて、例の「しゃもじ」がまた出たという。

貴公が、出あったのか。

いや、僕ではない、近所の青年が度胆を抜かれよった。

さては、彼の狸め、今もって頑健であるとみえるな。

怪物「しゃもじ」のことについては拙著「狐火記」のうちに書いておいたが、しかしこのような剽軽な変化は、二度と再び出るものではあるまいと当時考えていたから、このたび再び出現したというのをきいては、まことに今昔の感に堪えない。

今から、四十二、三年も昔のことであるから、私の青年時代である。隣村の東箱田にある村役場へ用事があって、ある日の午後から出かけていくと、折りよくこの老友も役場で雑談に耽っていた。

今は既に老友となったけれど、この老友も私と同じに歳は若く、気は盛んであった。久し振りの機会であったので、役場の小使に頼んで、濁酒一升を取り寄せた。われら二人は、豪酒であったから、僅かに一升を酌みあったのでは、腹の虫の機嫌に触れぬ。

とはいえ、季節は折柄養蚕上簇に際し、百姓は働けども働けども忙しい。しかも、働き盛りの青年が、酒をあおって節季を等閑視したとあっては、荒神さまに申しわけがたたぬであろう。

貴公、今日はこれだけで、次回を期すということにしようじゃないか。

よかろう。だがな、二人でもう五合ほしいじゃないか――。いや待て、腹の虫を抑えるのはここだ。

惜しい最後の一盃を呑み干し役場を出た。友は役場の前を出るとすぐ左手へ曲がって別れ、近くのわが家の方へ帰って行った。私は、野道を東に向かい、わが村の方へ急いだのである。

初夏の微風が、ほんのりとした頬を爽やかに吹いて快い。六月はじめの田圃は麦の波が薄く黄褐色に彩られて、そよそよとしているけれど、桑は濃緑色に茂り合い、畑から溢れんばかり盛り上がっている。なんと豊満な野面の風景であろうと思いながら、感服して歩いた。

役場のある東箱田と、私の村との、ほぼ中間に殿田用水の石橋がある。石橋の手前の方二十間ばかりは、路の両側に桑畑が森の如く茂り合っている。路の幅は、一間半あるかないか。

永き夏の陽も、西に没して空の茜色も消え去り、行く手のほの暗い東天低く、宵の明星がきらめき光っている。鬱蒼と茂る桑畑の路に歩を進めると、ここはもう淡暗だ。

理屈があったわけではない。予感があったわけでもない。桑畑と桑畑との間の、うすくらがり路へ一歩入ると、私の背中は俄に、ぞくぞくした。

甚だ妖しき、ぞくぞく感である。これは妙だと思った途端。

その途端に、私の眼に映った異形のものがある。路の左側の、桑畑の茂った上に、淡墨色の空を背景として、しゃもじ形の怪物が、にょろにょろと浮かび上がった。しゃもじは昔から農家で使うところの、木彫りの味噌汁しゃもじだ。

大きさは、およそ畳一枚くらい。しゃもじの柄は、くらげの足のように、ゆらゆらと揺らいでいるではないか。色は、漆黒。

真っ黒な大しゃもじは、しばし私を睥睨するように、のし掛からんずるようにして、宙に止まり浮いている。私は、眼に映った瞬間、仰天したけれど、咄嗟に一歩退いて、空を仰いでしゃもじを凝視した。

しゃもじは、私のすぐ前の空を、腕を伸ばせば届くかと思えるほど近く低い宙を、左側の畑から右側の畑へ向かって動きはじめた。柄は、猫の尻っ尾でもあるように、尖端をぶるぶると震わせながら、動いていく。

私の眼の前の、路の空間をゆるゆると横断して、右側の畑の上に移り、柄で桑樹を撫でる如くに進んで行くのである。

はっ、と思った瞬間に、しゃもじは跡型もなく消え失せた。後には、遠く星がきらめいているのみ。しゃもじの出現から消失まで、時間にして一分とはたっていまい。その間、私はわれを忘れていた。恐怖も、圧迫も、戦慄も、なにも感じなかった。

おそらく、茫然としていたのであろう。

ところが、しゃもじが中空で跡型もなく消え失せると同時に、私は背中から冷水を浴びせかけられたような感じに襲われた。四肢に至るまで、全身にふるえがきた。頭は貧血を起こしたか、くらくらと眼がまわった。脳天をうたれた如しだ。

走った。路も田も、畑も堀も、分別なく一目散にわが村へ向かって走った。わが家へ転げこんだのである。

翌日、私は隣村に友人を訪ねた。そして、昨宵の一部始終を物語った。ところが友人は一向にこれを信用しない。

着想として、奇抜だな。昨夜は長考に耽ったことだろう。貴公――。

いや、ほんとうだよ。作りごとじゃない。僕がこの眼で見たんだ。

だが、前代未聞だ。

この会話を、さきほどから友人の祖父が、鉈豆煙管をくわえながらきいていたが、それは、そらごとでもあるまい。わしは、若いときわしの祖父からきいた話に、殿田用水あたりには、昔から性悪の狸奴がすんでいて、とてつもない物に化けるそうじゃ。よんべのしゃもじも、たしかにその狸奴の、道楽だんべえ。

と、解説したのである。そこで友人も、私の話が作りごとでないことに頷いた。

ところで、友人の祖父が、若いとき祖父からきいた話であるとしてみれば、殿田用水の狸はよほど劫をへた古狸に違いない。

漢書幽明録に、こんなことが記してある。漢の董仲舒が、ある日窓の幕を下ろし、なにか思索に耽っていると、突然来客があった。見ると立派な風采で、半影まことに非凡である。董仲舒を相手に論議を求めてきたらしく、二人で五経を論じたところ、客はその奥義を尽くして

いる。

これに対して、董はちょっと首をひねったのだが、我輩は今の時代の名家とは、遍く交遊して知らぬ人とてない。しかれども、この客のような博学の人士と、つき合ったことがない。ことによると、この客めは変化妖怪の類かもしれぬと思って、董はためしに、

巣居却風穴處知雨
郷非狐狸即是老衆

と、客を一喝したところ、客は俄に顔色を変え、形が崩れると見る間に、忽ち老狸と化して窓外へ走り去ったという。

青空文庫情報

底本：「『たぬき汁』以後」つり人ノベルズ、つり人社
　　1993（平成5）年8月20日第1刷発行
※〈〉で示された編集部注は除きました。
入力：門田裕志
校正：松永正敏
2006年12月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

しゃもじ（杓子）

佐藤垢石

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/